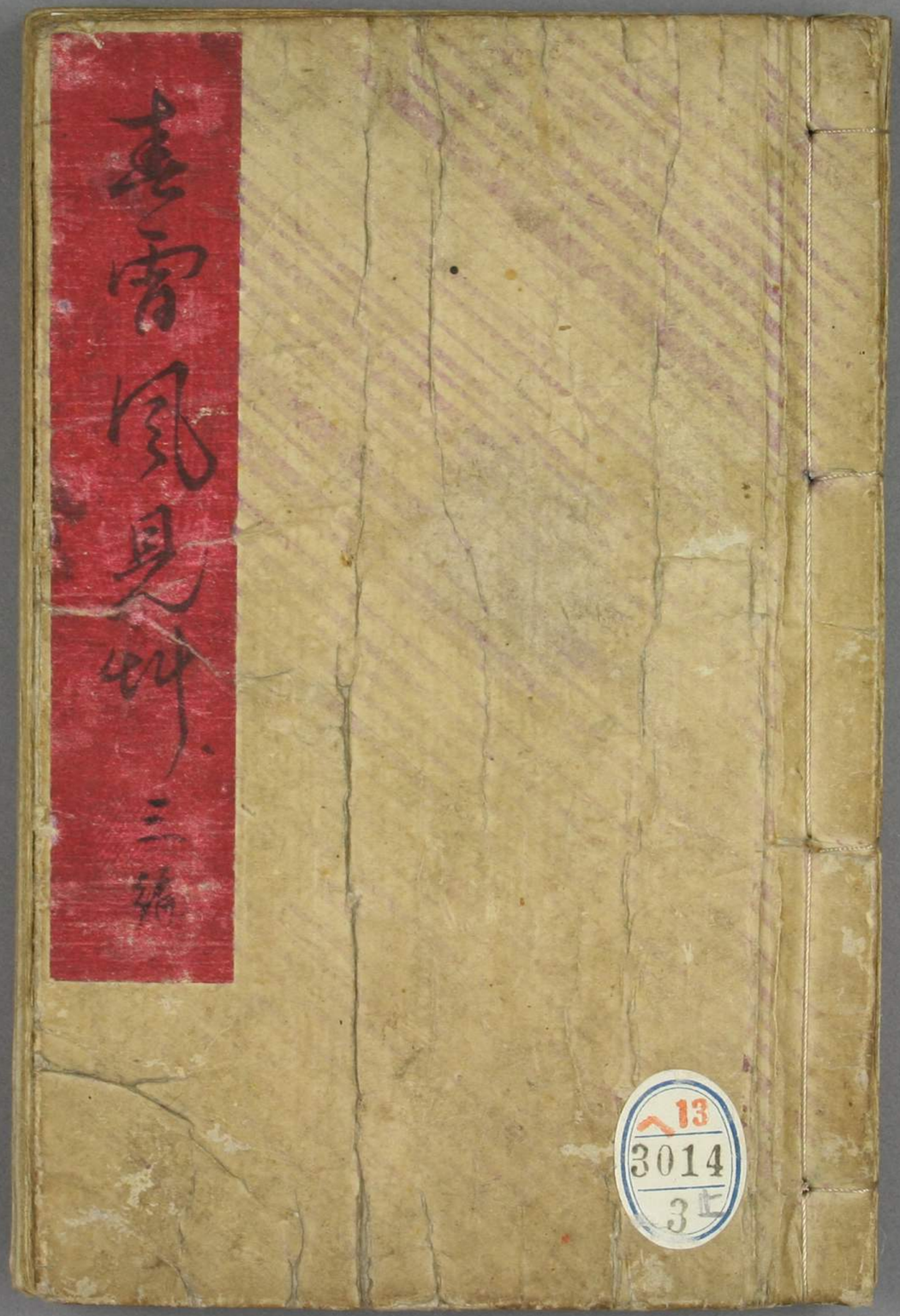

春雪風見草
三編
へ13
3014
3上

へ13
3014
3
特

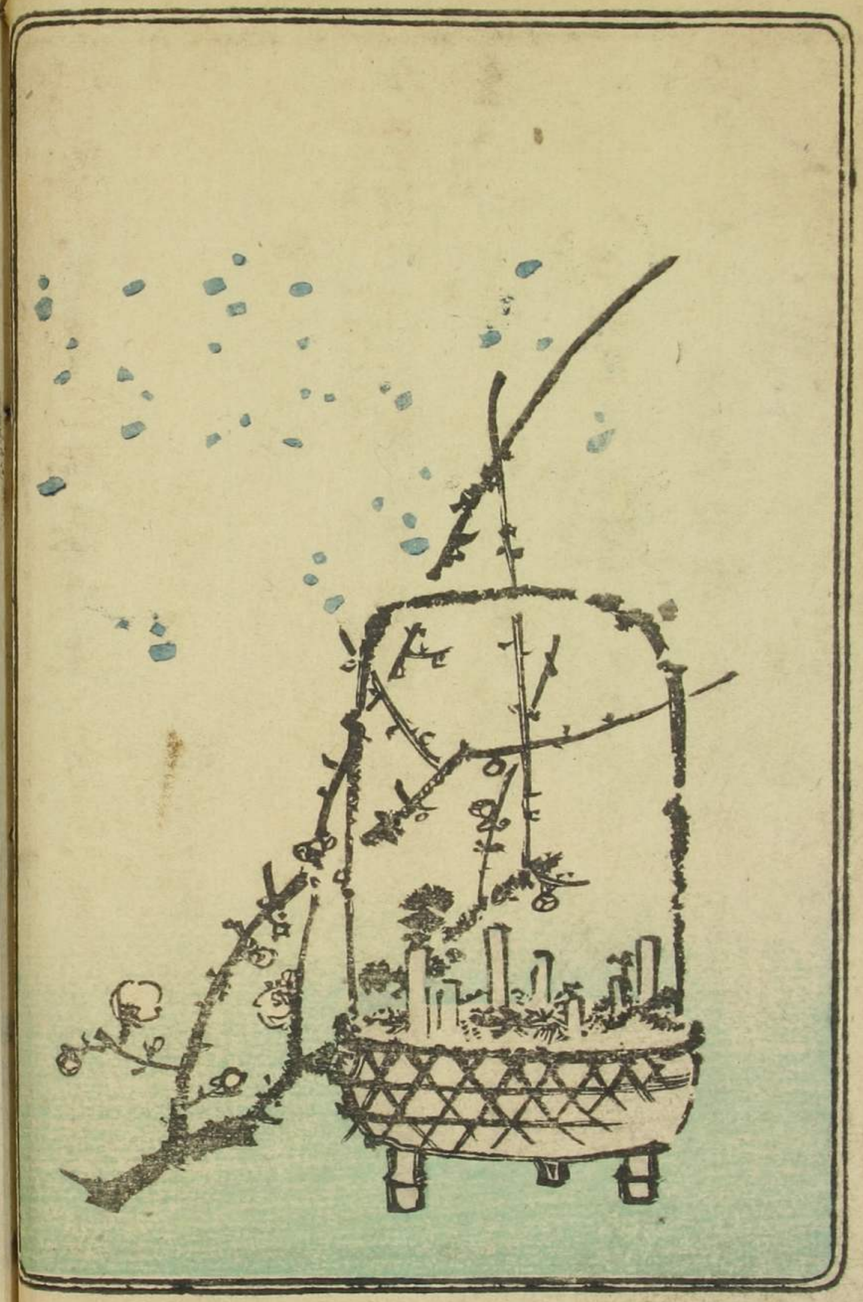
七十八号

叙

春柳や梦の日〳〵風の出来。実ノ世の中を風吹がい東ゑい早く刻る気でゝも。何程しゝ舎却う西風ゞ。近頃。強く吹ゝこのゞく。南る人ゞ蝶譯ゝ。出坪を看ゝんと竹車る。形らしい。その坪好むよう。いつしかと変く新

風ぞ裏つを笑へ吹戻し。何程でも
深き世を通と精進根の山の命を
墨染の衣の果まぐれの冥けて
暮と化ものいつしか絶て更
こゝ。赤正月も昔改め一月と。
春多門世の年の帝祝ひ門松メ師入
檀ぶらぶらほん俵ら。めでたく

物のはおもあらくの変さく。法体ぐん遠流の
程と寿ものい



春曙新話風見艸第三編巻之上

東都　梅亭金鵞編次

第十三回

與五郎の源三郎が世話みて花小路家人奉公ずと為せ〜後花小路が剣術の弟子根樹汲岩六花小路の娘お雪ふ恋慕し口説んとせるおから源三郎殿げ入れらりとそ岩六怒り源三郎を打んとせ〜と紀外紀左衛門出来りあるとを制〜外紀左衛門が居間の襖

さきあて岩六は源三郎へ剣術を教ゆるとゆゑ
既ふ双方支度とゝのひ面ふ手つけて立向へば源三
郎を軽を地ふつけ「さあの通り未ざいさうの心得
もさきとの仰合ゆゑ取立を能ひ奉りまたいと恭
しく平伏ゞ岩六を中擬のまゝ身を少き起ら上を振
り立て源三郎を眼下ふ見下し「フヽムゆるわど門弟
の子供あゝちゆゑ徒をよむとゝ是ゞらう能ふ教受
たり何拍やら波拍やら面の冠りやうも覚え竹力を

取るふたのをを先ふ〜て持自ゆゑ拍人ナと大ぶ〜て未さ
ゆ体ふアハ〜〜ト歩笑ひ「サア源三郎を素なく設いく
未いと衛立あゞをゞ源三郎ハ一ト足ゆさり徐〜と
立揚りながら青眼ふ竹力を構へて岩六がをの内
いゝゞと窺ゞよふ岩六を源三郎が手練の程を知ぎ
わゞ味力を持も大ゝふ今日拍めゝと岩ひ偽り「サア
源〜〜て振るのゞ波拍ふ拍ふ安方かゝ天窓を眼
ゞけ叩いて来るんゞト竹力をかゞり源三郎ゞ横撃

固げけかまうせふリウと音させ歩下せで源三郎いかい
潜り虚空を歩せて悠然とまで岩六むつと気込三歩
三歩つゝけさま腕の張りふ歩立るを源三郎いかれ
発ぐずカッシ〳〵と猪苗ゐぐ〳〵っと身を去さり竹刀の
先を歩込んとする岩六が拳の先突つけて書付
ざまで岩六を素ふ相遠し大きふ騒ぎ出奴ふか〳〵
出来るハエと浪滄つく足と踏ゐ〳〵油断いゐ〳〵ぬ
と関章を然め再び竹刀を上段ふかぶつてャッと

気合ふ叫ぶ外紀左衛つ声かけて「コリャ源三郎稲
右の義ゐまで書を貴ふ及ばぬ心まうせふ彫ふら
よいと指揮ふハッと庶幾れと岩六も京
強者ゐまで容易く歩もかゝらまず双方右だ
白眼ふ更ふ勝負ハ付さり」ゲ岩六ハ半ッも「オッ
声ゥけ源三郎ゲ笑ッ白眼ゲけ微塵ふゐまと歩下
すと中ふカウシと清とあられ抜立ーさふ三三
体当りとて突倒きんと六尺〳〵ずの大男宗歩

波の勢ひふて力を極め突かるゝと源三郎い身を沈め
めかい潜つゝ岩六が足を沙人で岩六うゝぞ自己
が力ふけ　飛んで三四斗り出人往きあんどり歩て
第斗ちづそふ傍への根府川の飛石の出張りし角
へ腰の帯を打付られて「ウヽシと云ひて竹刀と投出
し不張らしが指まりて面を打ませ早既ふ暗
まんとする眼をこすり起ふかゝまど獅伸ぎ我を
忘れて岩六が「アイタヽ源三郎い側へゆき「是い
お色い実ふ先敬まつぴらお免下さりはしと會釈しッ
岩六が腕をとらゝて肩へ手をかけ引き起さんとする源ふ
岩六ハ面を打あ泣声出し「アアイタヽ「イヤ是ハ何処
うお痛めなさいまし　岩エ、何処うどころ腰の骨ヨウ！
ヤホウイタヽく茲ふまと外記左衛つが娘のお園を源三郎
と岩六が剣術つゝふを見方ある一ト目の内より侍女
らと容子いゝぐと透見し　何ふも知らぬ源三
郎岩六ふ打すへらを怪我あど打ゝふ何振し

この一生不具の厄難ふでもさぶい去まりの嗚呼辛
気と思へば心もんあるぬをアて云るお梅もまた
溜息ばかりきてえば試合の体をお護りる側ふ
お竹ハ例の気性りのいち端先へ祭り牛て「アたく
まう始まりますすモンお嬢さまへ添三郎の頂あいや
うふよく摩利支天さまでも拝んでお参り拝でせナ
吾侯ハ先刻ッふ飲考さまふ地義さま。アアレ始
ばりまく素英くく万歳樂っよ。おやく添三郎の強

いるア。アアレ。アアレまア岩六さまグでんぐりかへつて向ふの方
へ滑ぐって仕まひ南くさアアレ「オヤくあんふお嬢さまアレ
起らまもせんまアくく涼こ郎さんの強いとアレお嬢
さまくと伸上ッうり振ったり毒び強く侍女ばり
お冥の嬢しき膝を進め身の伸上ッを覚えざり
ば寝ふ抱えしハふ寝ば付き「ハッと後べふ力
を振て「アと斗りふ手と合せ拝むい神やくれや
ら開いかからどど脱びの新さく眠き袖を引きお

根樹坂若

咄いたお墨をお前をよせて「アレ〳〵岩六さまがお踏ゝり抜ぬ
しさまゝまぐまアお起あなたゝませんお嬢さまアま
あのお優つきさきらんお花をぬもよ」「わんお波招いの
形ふお潜ゝの花だゝさまゝゝ岩六さまぐいぐいて
洗湯の流しの溜石さまのやうぐいぐいまぬんら
梅「まア金さんが来お花ふ入きるお声とふすつてい悪
こゝ出いまんしトこのふ祐人「オホ〳〵夫でも經お
さまアレ井香ぐこ岩六さまゝ何時までも起らとる

いのい黒木の石と岩六さまのお陰裏と弁あいせと云
のでこゝ生いませう梅「お嬢さまゝ孫こ弟ゝ岩六さまを
やつと起ーてアラ〳〵土を掃いてをつて居りまたあう
二人ゝお面をとろとからお警古いお仕舞ぐとこ見え井
松「吾倫も孫こ弟と試合と致ーまゝして貰ひたと
思ふふアレまアちまつたいアノ岩六さまのお優つた紀何
ぞ孫こ弟の咄力ゝ大きいと云ゝ除まりぢやアこ生
いませんゝ初へ〳〵

○偖も源三郎は是利ふく男ひ覚えし剣術の長練と以て岩井を求めしけるとび外祀左衛門始め皆おどろき其の多藝を称しける和尚小踏ふい男女二人うの子あり姉を右衛門と称し練之亟と呼び練之亟と以て外祀左衛門が家跡を相続すること当然なれども未だ幼稚けまだお園ふ聟をむ人練之亟が剣法の師範を其の者ふ譲らんと外祀左衛門をそまこれ人を撰ぶを家六縁て初

なる故我が剣術のたくのふ紀ふ絞うお雲が聟ふるくんとと望こと偖とて前條の次第ふい及びしあれ然るに源三郎が剣術岩井より猶るものとなるず諸義ふ冥とかつい心ざてさ人怜悧ふて行ひ亟実るりけを外祀左衛門ふ又こきものと表び紀ふお園ふ聟と為練之亟が後見とぞ委ねる義ふ能て源三郎い男ひがけくきを身ふ付らだお雲と妻と為お園ふ又墓ひ死ぬべく然をとる源三郎を夫ふ

て豆ひの表こび更ふ筆紙ふ[illegible]ーがくさー思ふとれ外
紀方家つい愛女あるお宮をぐ病根を推察あーかくな
たららひーものあらん源こそ弟ハ是までのお宮ぐ
へ子舎を其まく我ぐ拓召とあー徐武士の学問を倣
さんと机ふ對ひ五大剛の地図をひろげ彼是と心
ふ琴して拓るとろへお宮い来りて傍らより是を
覗き「お乳ぐ是まーたらお茶でも入れさせませう
ら源「今見たらどめくさ手りで左拓ちゆく俊て仕舞てい

除りざらまらふー勉強ちませう「ちっとお邪
ア る拓ぐ英吉利ざの仏蘭西ざのとふ国ふも矣
張京ぐらひゑんぞを乃る人ぐみうまんざらうう
源「夫の道だクり、何処の果へ行ても同ーとぐから
蛇夷扶桑のお方でも心ふ二つい交いこいると云ふ
唄ぐ有るのざらうサ源「跋羅巴とやらぐい男ぐ
大そう女と可愛ぐって赦ーて天子さまでも お
大名でもお妾を持ーこの出来るいとの張ーぐぐ

夫い実に山のことでもあるまいぞ
つても女房一人うとも大切にして妾をもとるな
のが当然サキの「ヨヤく五郎位いまゝと男いお妾を並の
が当然うとおもひまたかゝ来居も一人うお妾を
お並せしうとあドて祝父さんふ様のお話しを
係「とんでも主の被仰してお妾さんに向つて言うら
い親として居るさん勿体ないと心ぐ愧て居る
のがりのう芸の「あれまゝ被招る夫ざゝ吾儘を

まう係「止を宜うとと後悔しても出雲の神さまの
お帳面へ記して仕舞つこのがゝまう自由ゐい成らる
いヨサの「何卒さうどと婚しのけ是ど神さまの成とで
お佐賀あれるうのゝ言が撰るのでも先のはす
係「ホンニ左様言て居を出で手招るのも理分世宮ふ主い
とゝ云へなのと結すよりして云ひ出るお古世がうの人の
如何ぞと塞げで塞ぐ顔色でお宮をふ見せずと笑むゝ
ひ「エヘシと云ふと次のるうゝお竹が例のえやのそとみ

「イ」お煙草盆をさつれへ盆ます

第十四回

茲ふまつと淡茅ヶ原のふ屋ふ住居彼の非人の長五郎
いふ古世と窮ふかとまひ盆き雪踏や踏の換ーと
直すが常の家業也「を入れ〳〵と呼ばゝ隅
田村醒井戸婦多川のすとく隅まで見ふ古
世ふ変る人相の與ふ郎らき者あるで問ひ
呆んと名へども億万人の栖の地いづまを夫と

枝折して見ぶんやうも有らざまで一時ふ古世ふ
向ひ長「毎日〳〵竹の子笠をあそどふ冠り眼を四の
やうみて穿蕨る程の写さそうる人が来りやアよふ
郎さんぢやア移人ゝと気を附ても見てさその変人ぢ
かゝすそるゝと男のだうりで知まろとの変人探し
ゝの被相ふとふ壌さんを出ふ呆て自分の米樋
の足しふするのゝとふ名ひ成ういゝ知トやせんぐ向ふ
為の去年の悪着ふ法ゝまて宿場の女郎ふでも

愛れ〳〵こと締め菱笠とつ冠りて弾ても弾ね人でもこと
味線を抱へ女房と成て人の門ふ〳〵一軒〳〵ふ
よめ弟さんとお姑さんが自分ふらゝねて歩行さら
抱〳〵ゝゝぬるも有るなの開〳〵て女め弟さんふ
逢ゝとゝ見て欲を喰〳〵て見と洗へば矢張元のお壊
さる男傾城とゝゝとよう箱を洗〳〵ても孔方法で
汚さぬ男が女の貞操おすめやすもにぞゝたく
云ひ出〳〵悪いとゝゝ在家の知まるい人と

尋るゝゝ又とゝゝ出あるき渡世の女房をつれ
ゝ乳ゝ出人やせんゝと云わゝくお古世いさ〳〵物
むき暫内監え居ゝゝ叔父さんのお
言ゝさる通ゝ吾儕も彼〳〵こ味線をゝて毎
日出ゝゝゝゝ一段いゝ女め弟さんふ逢ゝとも有る
ざゝゝと他の人の出逢ゝを見て浦山〳〵
男ゝて居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ辛〳〵て
出て下さいゝ迷利と成ゝゝ捨ゝゝと思ふ時

のものの身体よりも弟さんふを遠へさえ入られぬ美ふ組
しさ妹しのとかるのいが保吾儀の格ゑ下をるこ味
線でか弾て出るとか出来まのかと若者て江戸の斗
長「お茶さんの手並を見やうとゐふうち此るの晩
一寸調子と合せてお貰ひやしこのサ格へて際
いとか初らふのが彼の撥あうちやア女子美ふ
出るりのゑぞふい及ふ奴ア有りやせん標致と云ひ
藝といい外の小僧の女どもが恍りいうやせう

保しおんがくとか言ながく持合屋のお嬢さなが
女子丈ふ出るとか除りゑと「出られさえ入られば
除りどとでかこのけをどが実ふ不ゑる声ざかく
長「声ゑぞの隆章が焙ア嘗とやうざろて様う
まとアちゑ性へやせん「唄うのの常盤津ろ新
内でこ言てかの彼ますんろ新人長「ゆざろて情と呈と云
ふ極りかこ人自分の好ゑのりの唄つく出るのサ
「丈でか端唄でも匿古性のませうう長「端唄ゑんぞ

はるして今のまゝ実ふ猪猟でも殺人やす丈で
ハアノ我身の替唄で
「ゆふと言ぬいふふ弥まさる岸の山吹にあの名さえ
香さえ散水の行へ定めぬ弟まつゝわつぬ別れを
一人森の奥の老ゝ世げるのつゝ合ト
言ふ唄をうゝこつて歩行てもまだ立ぬいませうゝと
なるゝ弟がゝ山吹の花の小枝ふ結付ゝ紙ふ書つゝあ
残ゝたる唄の文句と言ふを吹き長め弟ハまゝ

て「とハつハ渋い結構ゝゝふゝし皮ハ黄ぶろて張るけと
どけこ味線で沢山ざ間日茨笠を買ハ来やすか
らまハ出ろけて市流る世人やゝ性昔ゝゝその仇親
の仇を討うとゝて食非人と成とりのハ和経
もうゝ又朝臭ハ阿蘇次弟を尋ね銀雑ゝん
くふ眼を泣つぶゝ瞽女と成つて露の乾坤宿の
唄とうゝひゝんえぬ眼でさえ京人ふ回り逢ひたる
例ゝも有ゝがゝ弟さんも持の山吹の端唄と唄ひ

よゐ弟さんとやらの在り家を早くお捜しなさいや
し実に足利の古女房さゐふお初にせゆさるけ
りやァ成ら病人義理ぢゲた拵ゑさらお茶さんが
死ぬの生るのと云ふ事ふ成うと云ふうう済ね
へとて初りなぐらよゐ弟さんの足付るまでい
張して居て古沙汰いやさ病人うう一刻も急
いで捜しあてるとてゐさんやし左拵すすりやァ
足利へも出張しゲ出来ふるうう古女房さゐのお

欲きとも棄さをお礼の休まるゆうふ成りゆ長ゐい
ゐせりの公案の外とい雑ゲ云ひ出さらお茶さんの拵
ゐ内まゐお宮でも比拵ゐ減法うのなるゆとゐさる
かう下僕らゲ小屋人蔵ゐるア雷鳴。ハテ怪引力とりの
者ハ不怪ゐうけの理屈ぢゐアと貢を傾げて猶と猶
むずかう波る厂金の声ふお古世い耳と云て用ゆまうう
十時ゐ云うんと云ふ時淺草寺の種。ゴオーン遥ふ聞
ゆる拍子木の音。カチカチカチ

第六

○再説根樹坂岩六が家の邪宮せ一源三郎と剣術
けいこふ事よせて男の夜ぶん歩さいるを柏の中なる
そやうやと愈さんりのと思ひの外源三郎が乃ふ投
出さまと腰の骨を疲りしのそるくぞ外記方へつ
い源三郎が剣法素生よりとて絶ふ源三郎とて
お古世ふめあい世家の婿とあ一練之丞が後見と
定めけるあ永服てしさ限りあく如何ふりく
源三郎が落度とん出返させんと始計吾

れどもぐりと為すべきことをもて程こふ之夫一彼の巫
べ清ぐ口入れふて見ふ路へ未ひしるを思ひ出一巫
兵清ぐ方へ進き被を縁りて其の素性を尋ねた
で好さをがりても得るとあらんと監え一日巫三
清ぐ方へあきるふ巫三清い留るあく古烏多の
と乗りお烏多の源三郎と一ふ乃さんと其の拒
やうり乱と揉えて附つまの一つ挑こ功くえふ
路の狼お罠ふ取くさまとあで拒一さ寄方く

いづくにかなんと名ふとうの家縁て花小路の高ぎる
る事を吟味する事を以て事のなげうふあるさんと
名人を酒肴などよりして出すふ岩六も又源寿
ぶ素性を吟味と思ふよう金びらを切り土産と
長ーてお鳥屋ふ与人などするを以て双方の姫社
ふ油ぶ変りとふ源く辞さけ二人りい百年も
初深ー人の如くうまア是で一ッおとんなものよウ
茶碗でそっちゃア甘く欣ふいうサ岩六「辞せく

吟味とぶ有ると云ふ欣ふ〳〵第平でも欣やつで
扨りゃア茶然ぶつる吾徹ア右ふあさんのやうな武張と
左方ぶ大野ッ様ー好きちゃア好ふ〳〵僕ひ金て切て
左断りり工岩「どうしてなら〳〵堺紙へ書き申紙と絵さ
起請文を出て膳合ふ去て人奴ッ「と言て嫌ーがらせて金
て不家ふお家のきろのお法度と来ゆうとふ積りぢゃア
隙りぶ和人ッ手紙を吉風な奴ぶ名ものう「そんなら
窮屈袋とおとんなそいる移人ッ「待かくして兎くぶず

何瀬川と言のが雫石ーさかくの付板を着て仕舞
分ゝ司年吾嬬が紐をお解せるそのヨウ岩そんな事をして
花小路のお舞さんがでもうとられ〳〵夫事ゞッ非やすろ紙
波板を奴者ーて何板を奴をて如のゞ〳〵吾嬬ウエ〳〵嬬ア
付板を奴ゞ大好ッと岩六の袴の紐を解ゞ〳〵何知ゆ〳〵
つゆり若ゆくん岩六い板をあゝめて。アイタ〳〵〳〵

風見草三編上終

春宵新話風見艸第三編巻之中

東都　梅亭金鵞編次

第十五回

早きい既ふ散り迷きい板のまゝゞ冗うず遠く眺
めて雲の如く迎く紙むまで雪の如き今と盛り
の樣花海棠山吹ゆまゝ咲いで〳〵雅俗の拵客歩
もどひ花足ふ張えよ菖餘の隅田の拵を川べり
へふし距まて水秋の森ふ掛〳〵る水菓やの袂机

ふ藤をうゑ、掛しの花小路添に三郎と根岸坂宮六
の二人ゝ同く宮六いと延の銀煙管にて煙草飲のを
あゞゝ茶屋の親爺ふむうひ「花の盛りの却つ
て土手よりは比如のたゝうゞ静うで宜ゝ客のまゞ
除計ふ止るやう殘ゞ儲うまぎて仕方がある人
「イヤまう續くお日和でこの通りのお花見ゆゑ
風ふ吹れる花よりもお金がたんと欲うまたゝ
儲うゝ仕方がない仕いません有がゝいと考

し。「おの頃を月のよのので秋の花をゝふ来る
者ゞ多いこのと然すれで見世も早くゝ仕舞ふ
あるまの「イヤ車に乗ると十時すぎまでも見ふ
居ることゞ仕のます「秋ふ成てゝ川風がまゞ寒
ゝうゝふ遠くまでせ辟のお守りゝ陸分仕狀
ぞゝウ「イヤまう活計ふ駄ゝてゝりまたまで早く
楽をする拵でゝ困ります「彼方根ゝもちと赤碎
ひ拵でゝゝ如何で仕ます可ゝふ欲る

お酒も盃取らまた実に何で調法に成りほ
と（諸アレ）今往来の人が唄つて通るわとの辺りに出る
女たち皆が唄ひ始めるので彼の唄が当春の流行
ものと言でいふ（ヘ）た程でございます
矢張我ことの久しう「ゆふと言ふ云ふ詠
まきる者の少欠けるのの色き人香き人散る水ふと
中す文句を唄ひます女大夫を何う成ある人の
娘ごとの結ーで標致ついは声いよ三味線いよ

見る本ごの人ごこを恋込を唄を唄ひましたので何程
やら彼程やう一般の流行ものふ成てあまひます
と女の美しいと中すい様なものでございはすト
唄を心ふ覚えの文句若や若の女たち皆お世
が我と尊ることを倣せ一身の果らと当人
む心もあろあろ私ど出来ぬが為と掉りまで開き
らね親ふて親父ふむりひ我の唄をうふ女た
夫と言のハ様知らあうへも表ることが有るのう子

「有まんとも五はりとも」と言ひづゝみてとさゝ冠して
日御をうん「いろもまう」る刻限でさ陸のすゝや待
よろんふ。アレあの三味線の音ゞ遊ゝふ。オ待まゝく夫
ふ赤遠あゝまう一ぷくよるうちあん歩は知へ来り
遠ずト言ふ百姓あく掛茶屋の花簪の粧とふ行こ
て線こ味線の糸よりも細る指ふとり撥さ人数
処ゞろゝゝ其人を尋ねて日毎あの上手の雑集ふ
一々眼を配りうんとども更ふ似こ者さ人欲きふ

焦る胸の火の燃るゞうの緋縮緬ふてうけあ細
の佐びめもあどあく冠り菱笠の内より前の
袖机ある武士の親ふとうんとた源こ弟も若
ー夫ゝと五ひふ親をうん合せてパッと男人ど他の足
ふ眼ふ源こ弟「ヨヘンと」ッ咲だゝひ桜ゝゞめて開
初ゝ如親お古世ハ夫と取ずゞゝ。ワット半りふ泣こ
き戎泣で涙を吹ちんでん眼をかゝる三味線ふ隙
ぎあく声を張あげて

「ゆめと言ぬいふ弥陀ゐる岸れ蛍ゐ」の色さえ
香さえ散る水に行へ宮めぬ草まつゝあらぬ別を
と一人森の哀い巻る せがるのいろ
唄ふを吹て涼こと弟「ゆるる私感心ふり声が出る
評判ふるも安程いと言ゐゝ紙入より今れ
元出元西を古世いそを載きゐゝ涼こ
弟の乳を見て ゆいずゆろりと一ト雫洞の眼えを
押かく「有難うゐ生のまゝト性んとゐるを宗六

有止め「コリヤく女ちゝ丈ゝ方へ撫致ゐら声ゐゝなるく
感伏致いゝまうゝ一ッうゝえく 根樹扱君ゐる
きゐの端唄の古執心岩「ゝん ゐゝ唄ゐゝてゝ ゐゐ何
みのふ屋ゐゝ出る田南ゐ日ゞしゐ話せゝゐせ
私ゝい生栄の淺芽ゞゐふの長ゐ弟と中す者の
ゐゝゝゝゝゝの「丈でゐ性の長ゐ弟の家へ一升ゞげ
て来ゐゝでゐゝゝゝく「ゝく 綾りと花をゝんゝと
根樹扱君来ゐゝゝゝゝゐゝゝ除ゝ出ゐけま

せうまりや女ども更何をぐぢ〳〵致して居るまあの
拵るを女に居らまると心障りゞ早く往〳〵と言
るゞ〳〵叶掛茶屋を立出れば源三郎は茶屋の駄爺
小茶代を取らせて後より出うみ二人りの連立たのの
方へぶら〳〵往く其うしろ孔足遠うてお吉世の性然
たりける内通りすがりの生醉ゞ「何拵ゞ姉又と言な
がら脊中をどろ〳〵叩くお吉驚るき持る撰を取り
蔭せば畔の田の蛙ゞ田の水へ飛ぶむ音ポチャリ

○此如い何如ろ定ろあ〳〵祝どを後ふ遠ろし料理屋
の離れざーき入座仕ひふ
板見あ〳〵寛ひ者るい彼の
根樹坂の岩穴あて竹伝さめつ世

花さくに
ふつかなれば

親類へ預け手疵をもうけさせ障子人耳をさし付て
内の様子を聞合ふ陳子の内に別人あらず源
三郎と云古世の二人り巳辺へ帰るひそく声ふて
先刻載きまし金の中に証書の有て名札
ゞ書付の有しかゝ大家様の近所人来て仮りを
借りの云云と察しいたもうく書ふ宿人帰り支
度を致して寄りまし〻〻親戚方同ふ熟り合
て実ふ嬉しう書付いますと言て涙をかろと

流ひそで深く三郎も思ひ声「生腐連ゞ有さうく祝い
吹わず夫由来宿証書の云てある名札を見つさの
だゞ自己の心を察して出て来て呉さのゞ実ふ宜
敷金ふ出ッうかく夫で移人と先刻連ゞ云ふの呉
而と吹さ時流芽ゞ原の長、ゝ弟と云ふを言さ
かく〻文如へ導祝て性うと云つさのゞ仮様して
太郎の主様る家へ住さのゞト吹ふて云世の是利
久で家出ゞ縁て帰るの横井戸の様木屋を心あてふ

尋ねおのくの所へて年婚の去ふ樹の極木屋を
隅田村へ引越しなりと吹き隅田村を尋ねと
て向ふ島の去ふて勾引きんと思せしを弟に
助けられと是より長ち弟が身のこゝろこ味線を
弾て出るも彼招して出て逢んとその事あるよ越
落ふく話せ恋源三弟もまゝと思利を出て日の道
くより今かく武士とあり沢を絶き示せど流
石ふお墨ゞ一ト條りハ頂き程ふ話し越ふ

の話しで御ゝろつとゞふある初ゝ初へとゝに言ゞゝ最
初尋ねて来て年婚ゞ隅田村へ引越ゝと言ゝ家ゞ自
己の世話ふ成て居る極木屋でお茶ふいらげんゞ作り
ど我言て数えとのハ手知の娘のお鳥多と言ふ奴大
変ゞ根生の女にひろかゝ川て隅村ゞ銀雑苦労と云
さゞ者ゝし長ゞ弟とゆらゞ元ゝ世でゞゝ奉公人ゞ
とゝ天の助けと云ふとゝのゝ手男ゞ生惜ふ屋へ落て居
るといふのでゞ困ゝとゝけのゝ村まも是も許ゝ我

猪ぬ姪奔より亥狸ぬ貴君をお慕ひまうし親父
さんや意母さんぬ苦労かけると知りながら家出
を致しと罪科ぐ報つて来るのでぢやいます支ぐら
ら被招して来る君ぬ国ぬかくつてお話しの出来る
のぬ新夕ぬ親ひまうす観音さまぬ御たとん
元
是まあり死まして也本当ぬ残すとぬぢやいま
せんといとで内端の娘乳ぬ殊さら今の為を祈
て言んと為まど口願りッ泪やさきん出るあらん

第十六回

とん言ことの三味線をとりて毎日こ歩行ばかそ
被招して達まる門ぬあまを是ぐ呉の家ぬでも弄ぐ日
ぬ一生さつても初めとっとぬ有るぬ人左招してそると長
ぬ弟の家ぢやア尋ねて祝人ぐ早速どうぐせざア
成るぬ人長ぬ弟ぐまうすにいま嬢を被招してお来
ーぬぐら是利の方家へ言て弄つてん流ぬ祝ぐ
支程までに出ひ結て家出となすぐと云ぬ弟さんと

やうゝ逢ひもせずにお家へ引戻されてゐまとべ是まで
の苦労いれの泡で先のお方へ出も通らぬと板お和
さんもまゝ紅出すやうるとぶ拵ると雑多い拵し支
ようゝ小屋へ蔵ても死ぬあいま寄祝者を多くあい
豆腐屋ぐゝ初る人の其の土地を僥倖出して
おさびしの世人せて人拵まで廻り逢ぬとい有るまの
どう逢ゝ其ときに早速足利へお茶さんのお方の
ちくいち我お話しまし足と洗って元のお嬢さんに

お成りなさるゞ豆腐のかまうゝ与ゑ弟さんとやゝの在家
が初まさゝ吸と話あぐ一あゝ足利の宿へ初ゝ せる
とのと「イヤ夫よりゝお茶いえより長ゑ弟とやゝにも
自己ゞ足人を洗いせるゝ素人に成て機足利へい初ゝ
せる拵ゑ方拵言てゝ元る夫でゝ寄りやゝ足利へ数ゝく
中し沢ゞ拵人「イヤ夫ゝ縁とい考ゝ不出ゑ夫の今朝
あの一ゑゑ縁を掛て話さ人ゑ誘れて花をゝ元ゑ出ゝ
け拵拵のあゝ夫まで来ると向ゝゝ唄つて来る唄ゞ

足利を出て来ると云ふ山吹へ傳つて来た文句ばかり
の八丁雑が仰うと唄ばかり一字も違はぬと云ふ恵
つて来ると何処でも彼れでも彼の唄をうろうろして来る
やうなると水神の業屋の老父が祈ふ彼の唄に迫で
ろ代迫面を歩行く女ちゃんが唄ひ出すのでは其女ちゃん
い美しいの花切りで声が宜ろうて節が上手でこ味線が
あるかと来て来ることんばかりとうとう沙春の流行者と
成り海へと唄て若やと云ふ人折よく出かけ来て

やつは自己がうんで美しいと云やア雑が眼ある同一との者
とうとうる人を尋ねふい女ちゃんが出るのが一歩ごと云ひ
ながらうろう新内が盛津を唄ふとうろうひまうろう端唄
でも清元でも極りいやとのるばかりうろう朝臭日紀の春ふ
涼雪が河蘇次郎伝等ねうすが陸奥の千ぬ君の唄を
うろうて歩行とうろう廻り遊海とうろう長崎も来られ
のおとらんの山吹の唄と唄つて歩行うろう君国が殺られ
るとうろう有うろと寄りて押を強く唄ひうろうのでこ

対いまする流行ものゝ成りまして吾儘のせんぐい
なく文句の宜敷と存じます「何程して何程して文句
ぐらひで皆の流行ふなるものゝ程行ふ実ぐ
入り吹れと言ものゝ方法の方とさうぞう高とて何
程ご一下に掛てゐる人。サア出掛まして来う羽織う
まで行つと決て下さいまし「一ッぐるねい吹さうなも
んど「世大造ふまア是が何程して「吹ざア自己ぐと言と
ところぐ大張下戸で仕方が行人と必ときに彼方の樓ふ

て引三味線ふ推やらぐ
「ふと言ねいふふの方ふ悔る岸れ吹に方のるさふ香さふ数る
ふふふ見へ宜やぬ草まつう
「アレまつて頂れでも頂ひ出ぐ「ホンこまつう砂ぐろて多ぐ
宿ところやうでまつ今いまた此内業屋のふ女ぐ様出ぐなる
燭ふ忘れ忘れのけきとふうく高まる分ふ高ふ分
て一人祖ーの密やうるべー
○杢兵衛ぐ家の門口を除とあ開あけまと閉て木戸の

署で抜足の爪さき探りふ光石づゝを拾ひとりて掘
頬の雨戸へトシく指ふて弾けで内よりひきあけ新さ
出ず岩さんと五人ふさんぐるりて廿遅いふも程ゞ有る物
如ふあふてゝてお在のごと言い居るのんお鳥多ふて騒て
待つるふゝん岩いと知ら散眼と大指を出ず「
まとい源ゝのうまるとらゝて長物人「おん多ふ遅く来ち
やアとらせまのよ「大きな声とあちやア人ふ吹えんらア
ナと言ゞゝ源へとまびお鳥多い雨戸へとつけて岩

六と我ゞ源多人引込縁て用意我ゞ逃ろ徳利をち瓶
の中へ注ぎせ「お酒ばりで何ふも呑いよ「酒どころぢやア
物人犯父ふ初ゝやアちあ人うと気味ゞ悪ろてゝ物人
「行程ゝて大嘆サ「遅くふてお茶ふ呵らまこと変りふ
源之弟と女ち文の一件をすろうゝん届けて来ちのヨ成
ゝと祝ゝの通りに処ゝ尋ねて来ちとゞ有ると云て指と
ぜ「お程でおゝう子何でも山吹の唄をうゝと安ち文い
ふふさんと尋ねゝく来ちと娘ふ遠いのいと白眼ゞのサ

女房に言付らるゝ通り「かゝあ」と「雅のを」「自己の女房
ぞうら高のを」「吾儘ア花水路のお宅さんのとうと」
つゝ「可宜」「ゆびざア」「丈ぢやア」「よさん」と連て向ふ
お出のか「お稽」すると甘へ「梅ふ水祢」の菓屋で源三郎
と女ちよとべつゝり出かゝしゝが「源右衛門」とも表れ
ゝの開初ゝぬ新で別れ源三郎いよゝ忘れゝとと
ちゝと言て帰りと「ぎ自己」も一ふ花路へ戻つゝ
容ゝとゝそ「ねるゝ」「稽」あゝ「密」出て行ゝゝ「奴」一人りに

成て女ちよを尋ねふ出るゝと「ゆゝゝゝ」「方」も「衣」「猿
をとりけ人「ゐい」で後ゝ「呼」て「ゐ」女ちよのふ屋の「方」へ
出りけて「往」と源三郎の運の「尽」和「ゐ」の「々」の料理菓屋
へ「新造」を連て「ゐる」「ふ」を「見」ゝけゝゝ自己も「智」「恵」人
「ゆ」ふ其料理屋人後ゝ「迎」入を「法」「場」へ「往」ゝ「彼」「奴」ら
の「往」「家」を立「ゐ」すると「新造」とゝふのハ「矢」「法」さゝ「ゐ」の女ちよ
「ちゝ」と「ふ」成て「来」さのでよゝ「ゝ」「ゝ」「ぐ」のと「障」「子」の「外」ふ
て「ゆ」ゝゝとへ「迎」をとりけ「祢」り「我」「源」へ「往」ゝけまゝ「ふ」「鳥」「多」ハ

千寿

ちやらや服ちゃ茶碗利の酒茶碗へつぎ「岩六さんお婚
をうるよと言ねぐらぐらと引ゐうけ「ゐんとうにいめ人まい
なっちくのぐ弁して牡弟も牡弟ぢやア祝人ゐ小便ゐせ命る
新造っぞだろう引ゐうけて世江戸っぞの垢ぬけぐとのを食
せて出をうとゐやアふるくあて居るんぐア「夫ぢやアお茶
も源三郎と竹程ゐるぐとのゐ「ゐアふサ吾儀ぢやアるいゐ近
よ不意を窺ゐ幸場ゐ有つてあの人ゐ捕ゐけぐけまど照
て居てゐを出ゐ名ぐ祝人のぐョ「お茶も源三郎ゐ花ゐ路

と思ひ出さるまでで宜とおもひ自己もまぐと方程ゐゐ訴
でゐゐの推量の通り源三郎を遣ゐけて来ぐと娘ゐ女を
夫ゐ成て居るぐゐ源三郎と抱ぐるゐして引出ゐ廻り合せる
新向へ十名ゐ一日で祖のゐぐゐ是ゐぐゐ居ゐぐゐ源
三郎ゐ非人の癖その邪魔ゐ扱ゐ女ゐ夫ゐ情合ゐ有ると言
て偏屋ゐやぢの外記ゐ来ゐつゐ告ゐぐゐ出ゐ外記ゐ来
つゐ丸眼をして源三郎をぢろぐとくるのゐ必定ゐ程ゐ人
盛りやアゐ園の聲と言ゐけて「イヤ自己ゐ一盃吹して

それ狐人ら「お雪さんの舞ふあるうとげる者人吾儀がお酒と
たてひのくうて振ッくる可笑くるいぢやアるいら「お
雪の舞ふ成くるのい涼三郎だりゞア呆れらア
お前おさんが端ッぱりて大強ぎをうて振るくせふ「ら
おうめエ自己の大強ぎをうて振るのい亜言語さんの狼
のお鳥爲さんふゞア「何れと押やアそんな音が出るこで
ス空狐いとれのこ味りのあのくせふ「そりやアお前のと
ゞア首尾よく涼三郎を退ひさせ家人引取て仕舞

あひゞのお厨そゞア情け狐人「吾儀ふふふさんを引
ととしてお前さんいお雪さんの舞ふ成る積りでせ
うゞそ招ふずるいとれみせるのヨ夫ぢやア釈父の眼
を忍んで彼招して味しんゞ功ゲるのとの「功ゲ有つて
何時までもあびり付て居らもとと涼三郎を家へ入
れるとき部ぢふ成て仕方ゲあるめ人「生え刺ッくるきの
ぼりこ乳ゞヨ吾儀ア あんるせッ白い男よりいい方爲ら
うり者ゞ男ゞ好サと岩六ゞ撞人ととれかまだ「自己

もさうぞ出雲のやうる小娘を古鄙さるをとらえて所
るやうで甘味も甘ろけも有りやア高砂人情食へ
年始ふとぞ見さたば拾るをのあるのを抱く寝
ちやア何拾しも「欲の内るのぶ待どうう三波
拾して寝るのぶ待どうサと欲着引うけるその内ふ
本ア清ぶ咳。エヘン〳〵

風見州三編中終

春宵新話 風見州第三編巻之下

東都　梅亭金鵞編次

第十七回

江都城北の庁田舎手結木坂よりすこし引こと田
中とあん唱るあくうい拾山家花のせ垣ぶぎ木
戸〳〵内い稔〳〵ふ作うあるる樹木草花種の方
年青や風葉の柳かけめぐらす細道を住てやう
やく低長くなるい是拾木屋の接へるべー斯さば岡

静極りて音なしのいま老を鳴蛙多の外なる菴
ふ彼の花小路の源三郎い極の障るとめしあけ
表面のうつと恍惚ぐ〜川面でも見わたす爺イ
やあの帰りの郵迷いたづいたのが美しも彼地でのう
六ケしいのでも言て居るうちあるこん子へお世さんお茶
い何とお当ひざと吹まて世界い炭屋の岩を火鉢
へ次ぐ〜「ヨヤく」お根でお社のますうち子へ吾輩い郵
て貴君のお世話をいつてて居るのでめしも遠のこと

思ひます仕ん開いて爺やアが帰つて来ますと何程とお成
ますう初まるのいと貴学でく我の結ぶ成吹のが実ふ
否で成りません自己ごろて能も行へけとど拵く
遠つ分ふ能ね人のでれろあく出さ爺ろ〜のぐ出
して爺ろ〜ろうやアなる自分ふ物ら行人と薬るず
ふも居〜れ私人のヨ「ホン三吾輩の足でさ人三日ろ四日で
来らまる道を爺やアグ立てう〜今日で九日ふあの
ますう「実ごろ〜何程ろ〜ろと当つて居るのヨ「吾輩い

ちゝ二三日ありて立あいとぎんじて帰りさへすく
実ふるあの物をでいたのいますれへ「ゆ」ざう位げさう
ふ火鉢をあふぎ立ふとして逃走でも出来るのゝ
一座立ち招でいたのいませんが先刻動板の画の先生
うゝ載いと新茶を入れてよこませうとぞんじてサ
ル「ホレ」今でい素人ゞよこをあふ茶を製すので此辺を見
るとなの知の座ふも堂ゞいい植てあるヨのうト佐しの
うちふ遠方で初社宇の声まとを二人りい「オヤと

言ーのを耳傍てく寂然ゝうう
深三郎と云ふ古世ゞ去の田中ふ寓所するとふ元
い茶ふ深三郎ちゝうゝずふ古世ふ達しよう能ゞ為
のよこの紙ー我吸てい程あくべきとるゝ奴故竊ゝ
ふ歪多陽を招き人ゆきわを以て一伍一什をうう
く紙ー金銭達してふ古世いのちゝ長ふ郎ゞ豆
をも洗つせ二人り我きふの人とあるー角れどふ鳥多
ふい敬ーて約ゝせざるとゝ云系遠く離れー田中

の樵木屋のうまの隅兵衛をうち倒さてあらうか
古世と長ろ弟を入まこ亟るふ花ふ踏ゆてを根
樹板岩六が古墓を源こ弟ふてこ亟たうを走
恨ゆて伯がる源こ弟の蔵成ゆ〜え外祀たん
ふ吹付て逃出さぞ狂ゆくも古国の聟ふあうん
と云よを以て孫計の種こやあ〜んと本こ清
の方へ出紀源こ弟の素ふ性るど尋ゆんとせふ
変多傷い留守ふて古鳥多を相ふ酒るど欣

しが古鳥多いりとうり石代の性ゆる岩六が嚢
中のあてうさうるふすて脱こと辨ー伯ま
ふ拾うゆる板岩六い忽泥の如くふとろけふ
鳥多と情あるうと成りしい同乳求るのいあう
ん結まどふ鳥多い今ふ祀源こ弟を主ふ入ま
んとゆふ心の絶ざまこ不ふ兵の又源こ弟が花ふ踏
と者ぐうり逃ひ出されて来らんを成ふむと伯
て二人うの種ーあち合さるぐと踏計うちふ鳥

多人峯の端唄をうそぶらせ出せ〜といふ女方を見て
なるほど見頃我が家人よりも弟哉尋ね来りし娘ふ相
違なりけるとて源三郎を岩六ふ出させ云の女
方を見ふ逢せるに女方の方ふて控へくまで笑すま
た女方を見ふ情合のある男を猶紳の家の娘の婿
とふ為て亦がときふよう追出さまんに必定を
聞きて我が家ふ亦きふ出あうふ我が
婚とあきんと目学表しあるる岩六ふ告〜うば

岩六喜び源三郎を連れ出して既ふ祝ふ祝ふる内
神の森よりの一件とふ成りて源ふ岩六
ハ源三郎を追ふらのあハ出るもあき機会を得
て一日岩六外記方ふ来ふ対ひ源三郎ハ元福会
の者人の子と言ふ人ども実ハ非人の族ふて既ふ
淺芽が系の小屋ある者と呼ぶ雪結束の娘
ふ古世とふ者と一度婚姻を以て今ふ
怨恨ひ〜ふ彼の女と出逢ひを為を我ら行

よく見附ようとて彼様々云ふと水桶の
森より料理茶屋のさるまざーきの事をうれ
よく人悪しく虚実とり雑へて話しけるを外此方
あつかはうち合点て居さりしが二三日過ぎ源三
郎を呼びあよ仕細あるとも暫内密ぐ方へ
身をひきて居るべきよりある故源三郎も多く
いか古世ぐるすの家那しくるあんと宗しお宮
みも告ず窺ふ為を退き手事を本当清

ふのを張ーお鳥多ふい内証ふくかゆて古世と入
れ亜くる田中の伯母ふ来りしよりお古世ぐ家の
足利へも抜くのまく捨ちへべきあく私ど長ある郎を
花御ふ立丈ぐ戻りた待居るを名彩お古世と
さー對ひの世帯とうあり成りとり然をど古世ぐ
為ふいくそぐくその艱難を経て為ひを遂さ
る心地ままだ嬉ーさと楽ーさい仮者ぐ言ふ
を待ざるべけるどど源三郎いお宮ぐ事も記ふ

かゝり且る水神の森のそぶり若し岩に腰らるゝ
ふるゝ女方夫ふ別深あり多ど話そらるゝ花小路
の家の班ふ為うゝや去ゝら如何ふせんと案ト
苦せわゞ乞も深ず自然して然ゝう世俗の
若ゝもの多く好男子ゝゝんゝゝを望むと人
好男子ゝる者の若楽を含して汁ゝる肉い楽い
一二分ふして若い八九分ゝり一二分の楽を求え
んゝして八九分の若を受るいと思ゝしきゝる

ふゝずや血乳盆ん の姫刀称ゝもい世理浅深く察ゝ私ゝ
再説源ゝ弟と太古世の二人ゝい新家のふゞなのゝ
香い有ゝゞど源ゝ伯兵の確しさい実ふゝる私の家張
もなく然ゝゞど太古世ゝ心ふいまゝゝ比ひゝゝく楽しかゝる
べ水ゝゝ門のゝく者しして名ゞ足ふ入り来るゝのい
別人ふゝず垂ゝ清の声にて陸子の外ゝゝ交踏町
よゝの太客さゝと吹て駕ゝく源ゝ弟太古世い早く
次の日の隅紙あけて月を隠せゝり此時太客い垂ゝ

清が後方ふそひて此処に来れば源三郎いえいでて
内より障子を引あけて「オヤ誰かと思ふて見る
能お出ぐろと称人と言へば清が「然れバサ
ルくる仔細ゲあつて是非お目ふから称ぢ参るぬ
放老父ゲ申案内申し清さ。サアく御客さゑお上り生を
ぢすも申遠慮ゑへ及びませぬト言まてお客を
斜敬ゑして徐とよりて清へふ是まで「ゑぜ来れ
ゑ処人サア大祢の例へお寄りゑ爺やアハ何故来ゑふ

ゑく来るのぢよりて〜宜ぢやア称人ら「イヤ老父ハ
し買物を云わるかく一寸千話木扱まで往て来ま
せうト言すて〜つと出て往んと せーゲ又立戻り「せんゲ
お客さゑのお出の伝報源三郎さゑふ一ト通りお伝
しやしてのるふ者ませうト莖ち掃つく手ゑへと
り「偖彼招でも待のまりに源三郎さゑ立今郷お
留さゑゲお忍びで老父の内へお出招ぢ来ゑゲ
何処人ゑお出うけの有さぎり幾日もくお伺りゲ来い

うゝ稚くおまをお撫を抱だして外祀さるゝおゝ尋ね
ゞ者さゝ彼の堂家ふ立れ和仔細ゞ出来と板暫時の
君主を清方へ預けゝあるとぞ方猫ゞやれとの作者
りつけふお宮をさゝい初めて怕くり夫らゝ脆く容子とお
吟味をすと稚く雑多の悪祝西多く系ふ実正を少
ふ未と開して涙さゝ弁さゝふ逢せて異ろ沢米ふ書て
完度ゞあつとうひきろゝろお息ことも最ものと
いつて何も彼もぶちあけてお雑ゝ中すゝ方ゞ匿とあゞ

と西系お古世さゝの始めかゝの紋とちく一物ゞろ又
水糸の森のと若六さゝと娘のお鳥多めゞ姫計ゝと
ちゝうとゝ付はゝさうゝ丈とて残らまお耳ふ入まま
いたゝゝお古世さゝのと残お宮さゝゞは感心老ゞ
丈ふ今ゝお古世さんとやゝうの銀雑を和さゝのお嫌ゝ
で廻ゝ逢ゝふ系ふのゞいゝう仮令女夫ふ為て恋や
うと根ふ持合屋とやゝうの娘でこれまゞ只のお人ふ送ひ
ふいと社作るゝゝ三まと 赤ふ色を洗つゝ吾仮分の

人間の入身と成ること申しながら大道の死び出家兆源三郎が居る処へ連て行て呉る方世さんと申す
母おかつて来たりの事少く伝実なる優しの少名老父もあんまりふたりざーげふめとーさふた
案内をやしとはーさ三モンお家をさ名屋ろろ貴者のお心者ごい何ふとお給しを捉ぜと吹て面ふき源三郎
八兵ともぐくと天窓を搔き廃ごをあてぞろえ
たりけり

第十八回

家ふまくと岩六い外記左ろふ吹つけて拍子の如く
源三郎を追出させーうで早くお家を我ごまふ入
んし此ごろ久ーく外記左ふつが何如へう行き留守ふる
放遠家ふくお家が部屋へ来てくろるふお国入りよ
う拵ぐずとゆきき義援の徳すいたず若や妻を使
ぐ家へ行の者つるうと必ひける左衛ふ碓井戸へ出りけ
妻を陽ぐ門ヒよりひそく内を窺へべお鳥ろ入戸附て

声をうけ「不審味なる仁をおあるなる稚人「吾儀ア
手を招るれ性とんだやア育りすもんョと言れて岩六
這入るぐら「お茶を呪くのぢゃ稚人夜暗那ら〻推ら
来て居やア者稚人ら〻と言ろ〻さ〻「お稚サ源三郎
さんが来く居るこ言ろて手を招る絵う根生とおゆ
のぐらうが源三郎さんい何如人性さこ夜暗ッと追
出されても取の「夫ぐろう吾儀ぐろて面白心接
いあるいの「まさまずいけんまくぐらお茶も面白く有

るめ〻が自己も面白く稚人今も花少路人性てうること
お雪ハ何如へ性ろう内ふ居ね人ろ〻ハ宅へでも来ろこと
呪いてうんまこが己恩も大概ふするぐらい方省が有れぐそ
お茶の稚なおやく馬と接合の成つこのぐア「ヨャおやく
馬ぐと解りなぐら二びんるんぐそと抱て寝てをるのい
お雪さんふ操ッまこて解り可愛さうぐと言ろ〻ぐア
「この女ア武士ふ向つて「武士も糞も入るこのり焼
三郎でも二本わさんぐそ「うぬ言ーて立ぐ方回ぐ

病人と狭扇をもつてお鳥多を蘇る日源三郎と云
男をへの字の届うぬ板立あるべし扨うゝ表へ来うゝ
彼の奸八と侠六い此時をうんて花で入り「こうやァまッ伝
拵しゝうんざと止ゆかうをを岩六い「己らの知つてうゝ
ぢやァ病人と振まいすゑが侠六の脾狡へ当れば生の
茂忽地ウシト例るて時お鳥多い少井の底茂拵三岩
六ゞ面人投つける板アリトおうりに岩六い白子指義の眼
多るゑゆ持うし狭扇を盲人ゑげゆ投つけると

例ふ有漏つ奸八ゞ眉ゐへ当り是日まゝ多而ゆ溜
らず手例さを同ゞく息い絶うりけりゆ鳥多い二分
の死人ゆ驚るき同岩六さん宜うゞんゆ礼暴てゆ亟奸
八さんも侠六さんも驚んで仕舞さァねまへと言て怕り
岩六い活を吸きんと為ゝたまとゞ灰を赤れて眼ゞ
内病で新ゑゞ洗つて拵るうちゆ別限やうゆく後る
茂次て岩六ゞ続の活もとでうゞとを奸八侠六ゆ
ともふ病ゆうゞて行とゆ悪の報ひと知らま

けと雲に成て家いへ計らで人を殺せー故捕へらるるとい
と云いけし迷も逐くんるたるくぶお鳥多も共ふ連ゐうんと
お鳥多ふ落亡せよとするあふ知るるそ破れーついで
ふ法も切らんと刀の柄へまと掛るぐらひつられそ流れ
のお鳥多も伸引るくぶ岩ふ連らるとて一まづ止
れ成落のびくう
○再流田中の里なる深三郎の踊れ家ふ変ぐ
案内ふて居ひも懸ぬお雲ふ来らると深三郎い流石ふ面

るく兵りぢくくとて居る打かくふも入り来る人ある故誰
あるらんと宵際ふうち回く迷くなりやーと言う陸よ
引るる花御ふ注ー長ある郎ふて何方さるる様いずお
とんるせんやーと言ふ後ひ入るる花ふ踊外記左衛門と
持今度文右つふて有りけまぢ深三郎いよく驚るき戸口
死出平伏ーお雲も後百ふ者きりて居れり備外記左う
文右つら各方ふ逃れば長ある郎い深三郎ふ對ひ一帰り
の迷ひのでさぞお案事るせんやーこうぐ彼くくく大あぎ

で三日めの夕豆利へ参ると豆腐ゞ以香入湯治ふかゝ出のおゝ
すをれ
ゝまゝ〻又以香まで御近ひふ家り御見ふかゝつて御古世
さゑの一伍一什と添三郎さゑの古出世の玉我御祈キー
たゝ〻死んざと云ゝ〻娘ゞまゞ生て居さうと法作て夫
ゝ〻辞人やうのゑの御あび雨ゑの也人ず豆利のお
宝人御ゝりゑされ歩ふ江戸へ戸出立の前人江戸〻〻花
ふ流の豆郎さゑゞ御出ふゑつて添三郎さゑと御古世さ
まの御方の上の御一夫も豆ゑも元来御さいの玉の古世ゑ

清〻と揚ゞ吶き今く根樹坂さゑとゆゝの流言で源〻〻
さゑ我近出さうと学尾鰭をすげゝこいをとゞ祈り古稲
ゝとゑゝ人ゝゝ一ふふ江戸へ行き滋雑の鈎りを陽ゞ
肝心とて波根して古一ふふ御出の沢と世て樹本尾本〻傷
もかゝゝ〻から口我出一「古稲」てきると老父ゞ御書きゑを
市案内やして案ゝとのゞ最坂の僥倖モミ御書さゑ何も
御案ゞゑさるとゝ古世ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
すゝとのゞと隅紙引内け「何坂子稲ゑゝとろふ御社ゑ

外記きう

さるおとゝ一ぶりで祝父さるのち機嫌をも伺ひよひ所
枝花小路の風形さるゐゐもお目にかゝえゐのさるゞ宜しいと
言わくお古世い父へ對外記たゞつお宅をゐもいとで細
ゐき風情ふて渡へも今うきき有さゐい流石晩景のの
著ーぞと誰ゞうる眼ゐもうんえとうる沙時長ゐら
ゞ深り呈ふて言附来りしとうんえ近所の料理案
屋より酒肴を持込きて社ーきーだい至ゐゝ一めう形
ゐりやアロ海波風考づうるお社ーゐ外記たゞつさるゐも答おゝ

門さるも宅お草外ーゐゝ一トロめーゐゞうなゞう渡りしき
相談ゐせ人やート盃とうて勧むもゐ外記たゞ第つも答右衛
つもいけるとて別深よく察大酒宴とぞ盛りかける
外記たゞつい岩ゞゞ吟ーゐ源三郎い女たゞ夫ゐ妻ゐりて元
ゲ非人ゐりとゆき拵亟べさとゐ有ゝ移ゞお宅をゐも法
さゞ源三郎とゐ三べゐゐ頼け亟為え拵穿とて足利へ
ひそゝゐ出法ゐ持金屋へ付てゞんゝの仇細を安ーゐ源
三郎い金く拵者の惚ふて縁金の生きとゐりしゞゝゝの

るより家出せしまうまる女去夫と中すん拙者の
娘お古世といふ者長ろ弟と呼ぶいえうせあてを
ひし若おく伴既長七の嫡なるよりまて落ゐく張
せそ外祀ちつも安堵して吞ちつと連えうまの田
中へい来しまうまるが源三弟い再度花小路へ返
りお宮をで妻とみるものうくお古世とも拵あべき
うくで問うて吞右歩ついえ来の宮をあまいい戸作
を出し長ろ弟を長ゞ伴既と定めお古世とけれの

まうで
うく人と色源三弟い花小路の後見ふて家督人ふ非
ぬ故お古世ゞ家の後見をもふし花小路持今屋
を姫め長ろ弟本ろ落まで家宮を家え孫ふ源
三弟とお古世ゞ中へ出来し男子を以く足利の持
今屋を相続させよろゞ張りよおの中ふ根樹坂岩
六とお鳥多の二人うい蛭井戸をえのいてよりまゞ
ふさるよひ被如ふ有漏つき果ハを食とるり益
木の肥しと成りけるとぞ

此の一巻柳の模様よりつぐきて最り細とかる数向
ありしのまど今組合ふよりて事成果し第三
編でとりて仮りふ満尾と為もの板迷渡も
つとも多し開を外影をかゝ巻成新ふりさ
解なる日を待まひ鏡の形を能ふあん

風見州三編下大尾